

純度の高い『具眼の士』 ～ 『混沌の中での一筋の光』 ～

2023年12月20日、筆者は、2004年にスタートした南原繁研究会の3代目の代表を仰せつかっている『南原繁研究会』のZoom『南原繁研究会企画委員会』に出席した。来年2024年は、南原繁(1889-1974)の没50周年で、『南原繁研究会』創立20周年でもある。今回の委員会では、2024年のシンポジウムのテーマなどに関して討議され、大変有意義な充実した時であった。委員の皆様の『純度の高い専門性を拝聴』し、大いに勉強になった。

南原繁(1889-1974)は、内村鑑三(1861-1930)と新渡戸稲造(1862-1933)から大きな影響を受けた。新渡戸稲造は、日露戦争後7年間、第一高等学校の校長を務めているが、南原繁は新渡戸稲造校長時代の一高で学び、影響を受けた。一高時代、南原繁は『聖書之研究』を読み始め、東大法学部に入学後、内村鑑三の聖書講義に出席するようになった。

東大卒業後の南原繁は、内務官僚から学者に転進し、ヨーロッパ留学を経て東大教授となり、政治学史を担当、政治哲学を深めていき重要な著作を発表する。そして戦争中は社会的発言は意識的に控え、ひたすらに学問に打ち込む。その態度をして、『洞窟の哲人』と呼ばれたほどである。しかし1945年3月10日の東京大空襲の前日に法学部長に就任、日本の敗色濃厚となった中で、法学部の有力教授たちと終戦工作を相談し、重臣らと接触した。そして戦後、東大総長に就任、国家の再建を呼びかけ、戦後改革の理想を掲げて、ことに教育改革に主導的役割を果たして行く。

筆者は、南原繁が東大総長時代の法学部と医学部の学生であった二人の恩師から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た(画像)。【南原繁は、『高度な専門知識と幅広い教養』を兼ね備え『視野狭窄にならず、複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む具眼の士』】と教わったものである。

がん哲学外来とは・・・



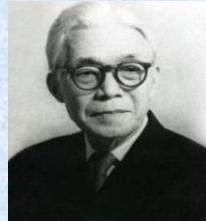
吉田富三



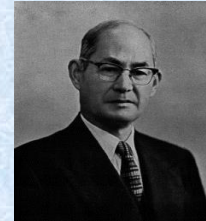
新渡戸稻造



内村鑑三



南原繁



矢内原忠雄



樋野興夫

吉田富三のがん学と、南原繁の政治哲学

2008年 がん哲学外来 開設